

イングランドから 北海沿岸文化を訪ねよう

ヴァイキングの歩みとともに

第6回 **デンマーク**

[最終回]

イングランドに最も近い北欧

伊藤 壺 Ito Tsukusu (信州大学准教授)



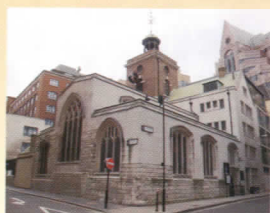
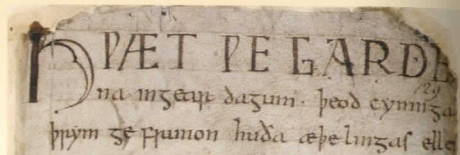
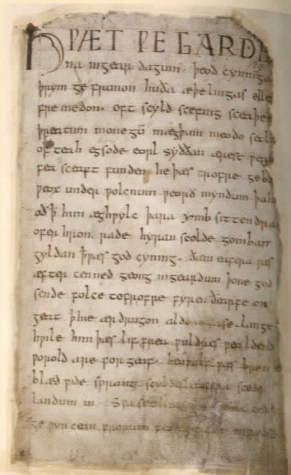
北イングランド、カンブリア地方にある
聖オーラーヴ王を記念する教区教会
St Olaf Church (Wasdale, Cumbria)



Sutton Hoo (East Anglia)
の船葬墓から発見された兜

古英詩 *Beowulf* 写本。
物語の最初の1ページ

(London, British
Library, MS Cotton
Vitellius A. xv. fol. 129r)



こちらはロンドンの聖
オーラーヴ王を記
念する教会
St Olave Hart
Street (London)

古英詩 *Beowulf* 冒頭部

Hwæt! We Gar-Dena

in geardagum / beod-cyninga þrym gefrunon 「聴け! 我らは槍のデネたちが、古の民の王たちが勲をたてるのを耳にした。」

イングランドと北欧とを結んだ北海

Viking 時代にイングランドと北欧が結ばれていたことは、この連載で見てきたとおり。アイスランド、ノルウェー、スウェーデンと中世初期のイングランドとの関わりは、とても一言で語り尽くせるものではない。ノルウェーの聖オーラーヴ王を記念する教会 St Olaf Church は、カンブリアの Wasdale に今も残るし、ロンドンにすら St Olave Hart Street がある。

一方、現在のスウェーデン南部にいたイェーアト族の王子が主人公になった伝説が、イングランドに残された最古の英雄伝説『ベオウルフ』である。またイースト・アングリアのサットン・フーから最も有名な船葬墓が出土し、スウェーデンのヴェンデル地方の鉄器時代の武具とそっくりのものが発見された。

けれども、英語の祖国イングランドに最も近い北欧といえば、やはりデンマーク。これは単に地理的な近さだけの話ではない。デンマークは中世北欧の中でイングランドとの繋がりが最も密接だった国なのだ。

『ベオウルフ』詩人が語る伝説の王シュルド

『ベオウルフ』の冒頭で、詩人は次のように聴衆に呼

びかけている。

「聴け! 我らは、槍のデネたちが、古の民の王たちが勲を立てたことを耳にした (Hwæt! We Gar-Dena in geardagum beod-cyninga þrym gefrunon)」という節から英雄叙事詩は始まる。古英語を話す人々は、デンマーク人の一体どんな勲を耳にしていただろう。

デンマークでは、中興の祖であるシュルド／スキョルドル (Scyld/Skjöldr) すなわち「盾」という名を持つ王が現れ、国を富ませた、と『ベオウルフ』詩人は語る。スキョルドルは、古英語では Scyld Scefing すなわちシェフの息子シュルドと記された。シュルドは、『ベオウルフ』中で「はじめ、寄る辺ない身の上として見いだされ、後に雲の下で成長し」て王となり、デーン王朝の基となったと語られる。

「寄る辺ない身の上」とは謎めいた表現だ。後世の年代記記者の書物には、この謎の答えが記されている。ウェセックスの有力者エゼルウェアルド (Æthelweard, 1000年頃没) の手に依るラテン語の年代記は、スコーネに打ち上げられた小舟の中に男の子が見つけれられ、土地の人たちにシェフと呼ばれて養われたこと、その小舟には多くの武具が一緒に載せられていたことを記録する。一方、マームズベリのウィリアム (William of Malmesbury, 1143年没) の『イン



フルーリーのアッポーとクレアのアオズバート著『聖エドマントの生涯』1130年頃
ベリー・セント・エドマンズ修道院 (Pierpont Morgan Library, MS M.736 fol. 14r.) イーヴァルたちの命令で、矢で射殺されるエドマント



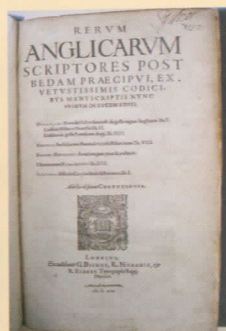
フルーリーのアッポーとクレアのアオズバート著

『聖エドマントの生涯』1130年頃

ベリー・セント・エドマンズ修道院 (Pierpont Morgan Library, MS M.736 fol.9v.) ラグナルが殺されたことを聞き、イングランドに渡るイーヴァルらのヴァイキング船団

初めて活字に刊行されたエゼルウェアルドの『年代記』も含む、ヘンリー・サヴィル編『ビード以後のイングランドの事蹟についての主要著書：最古の写本からの初の編集刊行』

Henry Savile, ed. *Rerum Anglicarum Scriptores post Bedam Præcipui, ex Vetustissimis Codicibus Manuscriptis nunc Primum in Lucem Editi*. London: G. Bishop, R. Nuberie, & R. Barker, 1596.



マルムストレム画

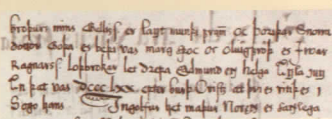
(J. A. Malmström, 1829-1901) 『粗毛ズボンのラグナルの息子たちの前に立つエッラ王の使者』1857年

父親がエッラ王に殺された知らせを受ける息子たち。玉座に座るのは恐らくイーヴァルだろう

アイスランド人賢者アリ著『アイスランド人の書』の写本より

「粗毛ズボンのラグナルの息子たちが聖エドマントを殺せたとき」という記述。3行目 Ragnars s.

Lopbrokar 「粗毛ズボンのラグナルの」、Eadmund en helga 「聖エドマント」の名が確認できる。Reykjavik, AM MS 113a, fol. 1v.



グランド人の事蹟』によると、スカンディナヴィアのスカンザという島に櫂を失った小舟が流れ着き、その中に幼いシェフは眠っていたという。頭のところに麦の穂（現代英語 sheaf）が置いてあり、そこで、彼はシェフ（古英語 Scef）と呼ばれたのだという。こうしてみると、『ベオウルフ』の冒頭で詠われるシュルドの「寄る辺のない身の上」とは父親シェフのことで、伝説が混ざり合ったか省略されてしまった感がある。

しかし、もっと重要なことに、このシェフは、イングランドの王の祖先だと信じられていたのである。アングロ・サクソンの王の系譜を伝える年代記は、ウェセックスやノーサンブリアの王はウォーデンに遡るとする。水曜日 Wednesday の名の由来になったゲルマンの神様だ。しかし、そこから6代遡ると、スウェーデン南部のイエーアト族の高祖イエーアト (Geat) の名が認められる。さらにエゼルウェアルドのラテン語の年代記では、このイエーアトが、シェフの子シュルドの曾孫だと記されているのである。伝説のデンマークの中興の祖が、イングランド王の系譜に名を連ねているわけだ。

イングランドで殺された、デンマーク王ラグナルの伝説と歴史

同じデンマークの伝説の王でも、粗毛ズボンのラグナル

(Ragnarr Loðbrók) になると話が変わる。粗毛ズボンのラグナルは、古い伝説では竜殺しの英雄だった。だが、9世紀半ばに活躍したデンマークのヴァイキング王の Ragnarr と、中世末期に至るまでに同一視されるようになったらしい。あるいは逆に、中世のヴァイキングの英雄が、竜殺しの英雄に格上げされたのかも知れない。

9世紀のラグナルはノーサンブリアの王エッラ (Ælla, 867年没) によって毒蛇の穴に入れられたという。しかし、勇気を示すラグナルは北欧神話の神々の宴に行くことを誇らしげに宣言する歌を歌って絶命する。ラグナルの息子である「骨なしイーヴァル (Ívarr beinlauss Ragnarsson, 生没年不明)」とその弟たちは、父の死を伝え聞き、仇を討つためにイングランドにやって来たという。『アングロ・サクソン年代記』は簡潔に記録を留めるにすぎないが、867年、ヨークでのイーヴァルたち北欧人との戦いで、エッラは殺される。そのままラグナルの息子たちは、イングランド中部の王国マーシアを通り、イースト・アングリアへと南下する。

イングランド南東部イースト・アングリアにある Bury-St-Edmunds は、聖エドマント王 (St Edmund, 869年没) を記念する町だ。異教徒のヴァイキング、イーヴァルたちに殺されたエドマント王はキリスト教の聖人にされたのだった。縛



**ハーラル青歯王のルーン碑文
デンマークのイエリングにて**

ルーン碑文は「父ゴルムと母テューラを記念して、ハーラルがこれを立てさせた。ハーラルは全デンマークとノルウェーを勝ち取り、デンマークをキリスト教国にした」とある



**ハーラル青歯王のルーン碑文の裏
のキリストの磔刑図**

キリストの体を蔓草のような植物がとり巻いているが、これは木に自分を吊した北欧神話の神オージンを模しているという説がある



ハーラルの父ゴルムが、妻テューラを記念したルーン石碑

ハーラルの石碑はこの隣に立てられた。ルーン碑文は、「ゴルムが、デンマークを飾りたる妻テューラを記念して立てた」とある。中世の夫婦愛のお手本だ

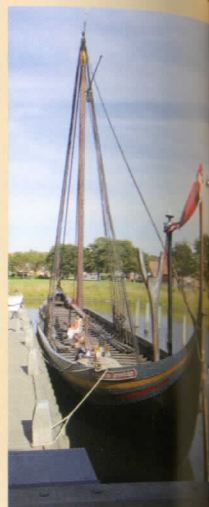


ハーラル青歯王やスヴェイン双鬚王が大艦隊の基地にしたと言われるアッゲルスボルグ (Aggersborg) の跡

大通りと町の中心を示す大岩が見える。海が近い。ここからヴァイキング行に船出したのだ



**アッゲルスボルグの復元図
48 軒のロングハウスがあったとされる**



られた王は数多くの矢に射し貫かれて殺されたという。この言い伝えはアイスランドの賢者アリによって書かれた『アイスランド人の書』(Íslendingabók, 12世紀初)にも言及されていることから、北欧人の間でもかなり有名な事件だったようだ。

デンマークの記念碑： ハーラル青歯王のルーン碑文

伝説を身に纏う王ラグナル亡き後、デンマークのキリスト教化を図ったハーラル青歯王 (Haraldr blátǫnn Gormsson, 現代デ語 Harald blåtand Gormsen) は、自分の両親を記念し、かつ自分の王権を主張する、巨大な絵画石碑をイエリング (Jelling) に立てた。ルーン文字は、ハーラルが全デンマークとノルウェーの支配を手中に収めたことを記している。「ハーラル王は、父ゴルムと母テューラを記念し、これを立てさせた。ハーラルは全デンマークとノルウェーを勝ち取り、デンマークをキリスト教国にした」とある。十字に手を広げるキリストのレリーフは、同じく木に自らを架けた北欧の異教神オージンをもじったものだとする説もあるほどに、異教的な香りも残っている。もちろん、デンマーク生まれの IT 無線規格 Bluetooth は、このハーラル王の渾名「青

歯王」に由来する。コンピュータ時代に生きる私たちは知らず知らずにヴァイキング王由来の機器を使っているのだ。

イングランド王となったヴァイキングの血統

ハーラル王をその王座から追い出したのは、他でもない、彼の息子のひとりスヴェイン双鬚王 (Sveinn Tjúguskegg, Svein Forkbeard, 986 頃～1014 年) だ。連載第 4 回目でも紹介したトリュグヴィの息子オーラーヴ王と手を組み、ロンドンを攻め続けたことでも知られる。ついに 1014 年には、誰もなしえなかった、イングランド王の追放を実現し、替わって自分がイングランド王となりかけたが、謎の急逝をする。妻エマの実家であるノルマンディーに亡命していた時のイングランド王エゼルレッド無策王 (978-1016) は一時帰国するも、まもなく他界。エゼルレッドの前妻との息子のエドマンド剛胆王 (1016 年没) が父親の跡を継ぐが、すぐにあとを追うように亡くなる。すでにエドマンドと和平を結んで、イングランドの共同統治を始めていたクヌート (スヴェインの息子、クヌート、カヌートとも; Knútr, 1035 年没) が、必然的にイングランドのすべてを統治する王となった。クヌートは、未亡人となったエマと結婚する。この結婚によって、デンマーク人であったクヌートにも正当な王位継承権が渡った。イ



十字架を拝するクヌートと妃エマ

キリスト教に帰依した姿で、イングランド王の権威を示している。エマはノルマンディー公爵リチャード一世の娘。古英語では Ælfgifu と呼ばれた。Liber Vitae, (1031). London, British Library, Stowe MS 944, fol. 6.

ゴドウィンの子ハロルドのイングランドの王ハロルド二世としての戴冠式

Bayeux Tapestry より



イングランドに侵攻するノルマンディー公ウィリアム

かくして古英語を話す王はイングランドから消えた。Bayeux Tapestry より

ヘイスティングスの戦いで
ハロルド二世の戦死
(1066年10月14日)
Bayeux Tapestry より



イングランド人以外の人間が、イングランド全土を掌握し、王として支配するのは、クヌートが初めてだ。『ベオウルフ』の冒頭では、イングランド人たちは「デーン人の王の勲を聞いて知っている」と詠われていたが、ついにイングランド人の眼前で、デンマークの王家から軍功と奸智に長けた王が現れたのだ。

クヌートが王座に就くことで、イングランドの社会体制にも北歐的なものが入り込んできた。それは、階級社会イングランドにあって、貴族の爵位を表す語彙に今も残っている。王の次に高い地位の公爵・公爵夫人は Duke, Duchess。次の侯爵・侯爵夫人は Marquess (英国以外は Marquis), Marchioness (英国以外は Marquise)。どれもフランス語からの借入である。ところが伯爵・伯爵夫人になると、英国以外は count, countess であるのに、英国の伯爵 (男性) だけは earl と呼ばれる。この語は、本来は「貴人、戦士」を意味する古英語 eorl に由来し、古北歐語で「広い土地の領主」を意味する jarl と同語源語 (cognate) でもある。そしてクヌートは、古英語 eorl に当時の北歐語と同じ意味を持たせて、王に次ぐ地位を新設したのだ。彼らはイングランドの旧王国ノーサンブリア、マーシア、ウェセックス、イースト・アングリアなどを治める新し

い権力者として王を補佐する役目を担った。

クヌート亡き後、クヌートの息子であるハロルド禿足王 (Harold Harefoot, 1015 頃 - 1040)、ハルザクヌート (ハルデクヌート Harðaknútr, Harthacnut, 在位 1040-42) が相次いで王位を継ぐが、彼らに子はなく、デーン王朝はハルザクヌートの死を持って三代で終わる。ハルザクヌートの異父兄であるエドワード (Edward the Confessor, 1066 年没) が、亡命先のノルマンディーから呼ばれて王位に就くが、エドワードの死後、ウェセックスの eorl であるゴドウィン (Godwine, 1053 年没) の息子ハロルド (Harold, 1066 年没) が、最後のアングロ・サクソン人の王ハロルド二世となる。彼の母はデンマーク人女性ギューサ (Gytha, 1069 年頃没) で、デーン人の血を受け継いでいた。しかし、ヘイスティングズの戦いでノルマンディー公爵ウィリアムに敗れ、イングランドはノルマンディー公爵のものとなる。けれど、ヴァイキングの血がイングランド王家から廃れたわけではなかった。フランス語を話すようになったとは言え、ノルマンディー公爵は、元々はヴァイキングだったロロ (Rollo, 931 年頃没) の子孫だったからだ。イングランドと英語は、北海を巡ってきたヴァイキングと戦い、ヴァイキングに飲み込まれ、そしてヴァイキングを飲み込んで今日の姿になっていったのだ。